

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

小川 軽舟選

雑然と春が来ている机上かな

東京 吉田かずや

△評▽年末に整理整頓した机も、いつのまにか雑然としてきた。それを春の訪れと感じた点に詩情と実感がこもっている。

岡山市 三好 泥子

△評▽寒さがぶり返す日はコレセットで守った身体もきしむ。句調からやるせなさが伝わる。

狭山市 小俣 敦美

永き日の時の進め小間物屋

京田辺市 加藤 草児

早春のサラブレッドに鞭の飛ぶ

宇都宮市 手塚 康雄

友の訃に地ひびき立てて落椿

大分市 久富 豊治

黒土の息吹き上げて陽炎へる

北本市 萩原 行博

春寒や先かたまりし父の筆

北名古屋市 月城 龍二

風花のゆるりとくぐる太鼓橋

飯塚市 倉田 幸男

焼き団子匂ふふるさと一の午

龍ヶ崎市 小宮 光司

地虫出づ日本にいくつ震災忌

川崎市 峰尾 雅彦

△評▽虫が穴を出る春の訪れを語りながら、能登半島地震をはじめ東日本大震災など度重なる地震を嘆き、犠牲者を追悼する。

唐津市 梶山 守

△評▽意思があるかのような山々の雲の姿に、長く待ちわびた春が近いことを感じとっている。

津市 秋山 歩荷

吹越や百冊超ゆる龍太の書

津市 秋山 歩荷

薄氷や水底の影はぐれをり

名古屋市長 加藤 國基

地下足袋の靴三枚春疾風

京田辺市 加藤 草児

ゆくりなき友との出会いヒアシンス

つくば市 小林 浦波

落椿雨の小止みに光りある

甲府市 清水 輝子

田の中に集落のあり麦青む

朝倉市 鳥井てんせき

ボン菓子の爆せて冬日を揺らしたる

弥富市 富田 範保

筆の先ほぐすごとくに牡丹の芽

和歌山市 福本 秀昭

△評▽固かったボタンの芽が力をぬくように広がっていく。それを、つぼみの形に乾いていた筆の穂をほぐす様子に重ねたのである。

岐阜市 透 乙美

△評▽カバン、制服、靴も準備完了。そのスニーカーが入学を待っていると言ったところが楽しい。

大 阪 池田 壽夫

春寒しポケットに手を深ふかと

奈良 高尾山 昭

春一番丸の内口八重洲口

川崎市 大山 知子

歩くたび水筒鳴りて春の屋

和歌山市 太田 妙子

一心に乳飲む赤子春立ちぬ

小金井市 宇野 雅章

十日夜蕎麦搗つくる妻の留守

那須塩原市 谷口 弘

犬小屋の鎖鳴りたる余寒かな

川崎市 折戸 洋

春立つや職はたたく菓子司

志木市 谷村 康志

海に船空に飛行機初景色

和歌山 神野 一馬

△評▽新年の海原を望む。ゆく船を眺めていると、青空を飛行機が横切った。現代的で晴れ晴れとした初景色だ。

堺市 佐々木正二郎

△評▽皿の隅にからしがちよんと載せてある。そこまで見せて一層うまさうな大根になった。

東京 山下留美子

寒月や厩舎の馬の背に毛布

出雲市 金山 陽

受刑者の作りし机冬日影

国分寺市 多治見千恵子

寝間の母口紅さすや冬の梅

南足柄市 洛氏 唯見

凍星や色鉛筆の金と銀

船橋市 森本 睦月

出迎へはパウショベルやスキー宿

茨木市 長谷 歌子

立春や牧神の雲あらはれて

川崎市 岡部 申之

やはらかに潮の香るや日脚伸ぶ

神戸市 藤塚 行幸

出会いの



季語

再び歩き出す

高田正子

今月1日、東京都練馬区の石神井公園を歩いた。前日からの冷たい雨が朝には上がり、それだけでもありがたいのに青空まで広がって、暖かな日となった。

星野立子

かつて身近な仲間と続けていた吟行がある。昭和の初めに高浜虚子一門が毎月1回ずつ計100回開催した吟行の記録『武蔵野探勝』をたどるもの。『武蔵野』といいつつ下総の印旛沼や新潟までも含まれ、一門の行動範囲は広い。私たちのキックオフは2012年4月だった。永年幹事を買って出る方がいてくださり、毎月歩いて順調に89回まで果たしたところへ新型コロナウイルスが襲来。以来中断したままになっていたのだった。

池田澄子

昨年師匠が亡くなって所属結社が閉会し、新しく結社を設立するという驚天動地の事態となった。ようやく我に返って立てた気分転換の計画が今回の吟行というわけだ。先々のことはさておき、まずは動き出そうと残った目的地の中から選んだのが石神井公園であった。虚子が行は昭和8(1933)年4月に訪れ、当時40代の富安風生が「大きい辛夷のある庭」と題して記録に書いている。温暖化の昨今ゆえ、ひと月の差はカバーできるかと期待していたが、コアシはつぼみすらまだまだであった。これは計画を立て直しが必要だな。

山口青邨

(たかだ・まさこ＝俳人)